

## 帰らない夏 — 学徒勤労戦没学友のこと

福岡市東区 吉田 親雄

帰らない夏に散華した  
友たちはこの校庭に還ってくる  
我等の悲痛な15歳よ  
永遠に安らかに眠り給え

これは福岡県立三池高等学校（大牟田市所在）校庭に建立されている「学徒勤労戦没学友の碑」の詩の全文です。昭和20年8月7日学徒勤労働員中、三井三池染料工業所（大牟田市浅牟田町所在）において米空軍の爆撃により非業の死を遂げた学友7名の冥福を祈り、永遠の平和を大願して同期生一同が建立したものです。

私は戦没学友7名と同クラスで、同職場で被爆しましたが、ちょっとした運、不運で生き延びることができました。これが戦争だと言ってしまうとそれまでですが、そのときの悲慘さ、悲情さ、無念さが今でも私の脳裡に焼き付いています。そして一生消えることはないでしょう。

昭和18年4月希望に胸ふくらませ福岡県立三池中学校（現三池高校）に入学した私達が、まがりなりにも授業をうけることができたのは1年生のときだけでした。2年生になると戦局の悪化に伴い毎週のように勤労働員があり、主として三井軽金属工業所（大牟田市手鎌所在）にアルミナ — 飛行機機体の材料 — 製造のため働きにいました。特に昭和19年7月サイパン島が米軍の手に落ちた頃からは、動員の回数も時間も激増したようです。そして遂に同年10月から私達は前述の三井三池染料工業所に通年動員されることになりました。それから終戦までの約10ヵ月間は学校には1日も行かず、毎日毎日工場で働いていました。

三井三池染料工業所は亜硫酸ガス、塩素ガス、コークス、ピッチ等を製造する石炭化学工場です。工場内は常時煤煙と悪臭が満ち満ちて、息苦しくなることもしばしばで、私達はタオルでマスクをして働いていました。私の勤務場所は2年生のときはF02（第二骸炭工場）でしたが、3年進級時に組替えがあり、同工業所大浦建築工場に配置転換になりました。戦没した学友達も同クラスで同職場でした。クラスメートは30数名でした。

大浦建築工場は正門の左手にコンクリート製のトーチカがあり、また三井三池染料工業所のなかでも一番山の手にあるため一見いかにも安全そうに思われました。正門を入れて左側に道路より一段高く木造事務所があり、右側には2階建の木造の木工品製作工場がありました。事務所とこの二階建工場との間にちょっとした広場 — 道路兼用ですが — があり、毎朝そこで点呼や朝礼があっていました。

その日（8月7日）は、いつものとおり8時半頃朝礼がありました。朝から焼け付くような

暑さで、汗がジットリとシャツに滲んでいたようです。その日の朝礼は、今思えば前日の8月6日に広島に新型爆弾が投下され相当の被害があったとの大本営発表があっていたため、大浦建築の工場長か、またはそれ相当の上司が出席されていたようです。彼が訓示をしている真最中、「ブーン」「ブーン」と低いですが確かに飛行機のエンジンと思われる音が、遠く上空から聞えてきました。彼はちょっと話を止め、空を見上げると私達にも空を見上げるように指示しました。紺碧の空に敵機2機が小さいが、クッキリと認められました。キラキラと輝いているのが美しくもあり、また傍若無人の振舞が憎らしくもありました。胴長で軽そうな機体からして偵察機と思われました。空襲警報、警戒警報等の警報は全く発令されておりました。彼は、不安のなかにもハッキリと敵機は偵察に来たのだから、今日は警戒警報が鳴ったら、必ず全員防空壕に退避するよう命令しました。壕は工場の側の横穴が一番安全だとも言っていました。この頃は警戒警報や空襲警報があまりに頻繁に発令されるため、私達はそれに馴れすぎて防空壕に退避しなくなっていました。

仕事はその日も同じく土木作業でした。モッコに石を入れ2人で担ぎます。東洋高圧工業所正門と大浦建築工場正門との間の道路（約200m）に石を一定の厚さに入れていきます。この仕事が戦争に勝つためにどれだけ役に立つか疑問をもったこともありましたが、「とにかくこの戦争に勝たなければならない」「何がなんでも勝つまではガンバろう」と自分に言い聞かせながらセッセと働いていました。今でいう石畳の道路を造っていたのでしようが、こぶし2個大の裂岩石を敷きつめていたため、敷いた当初はトラックがピンピン跳ねるほどでした。私はむしろトラックのタイヤ（戦時の貴重品）が切れたり、穴があいたりしないかと秘かに心配していました。

午前の仕事が終わった頃か（それとも昼食直後かもしれません）突然空襲警報が発令されサイレンが一斉にけたたましく鳴りだしました。当時の大浦建築には工員のほかに、海軍の兵隊や三池中はじめいろいろな学校の生徒が働いていましたが、空襲警報発令のためみんな続々と横穴式防空壕に退避しました。私達はむしろ遅いほうだったのでしよう。防空壕に入った途端、壕の両側はすでに退避してきた人達が一ぱい蹲っており、私達を見つめていました。入口近くが坐れないため、奥へ行こうと数歩歩きだした途端、「ブーン」という地鳴りの音とともに一瞬爆風が壕内を駆け抜けました。突然私は前倒しに押し倒されました。と同時に日頃教えられていたとおり、目と耳と口を両手で必死に塞ぎました。帽子（濃紺の戦闘帽）もフツ飛んでどこにいったかわかりません。その後2、3回「ブーン」、「ブーン」という爆発音がしましたが、その都度私達は壕の奥へ奥へと逃げました。壕内は真暗闇ですが、行けども行けども先があったようです。しかし爆風が壕内を駆け抜けたのは、最初の1回だけでした。

それから1時間もたったでしようか。壕の入口付近が急に騒がしくなりました。「空襲警報解除」、「警戒警報解除」と叫ぶ者があり、私達は恐る恐る外に出ました。一瞬マブシイ真夏の外光に戸惑いましたが、すぐそれに馴れると外観が一変しているのにビックリ仰天しました。工場は木っ端微塵に破壊され瓦礫の山です。事務所、浴場、倉庫等々地上のすべての建物が破

壊されていました。幸い火が出なかったのが、不幸中の幸いだったのでしょう。防空壕と事務所とのちょうど中間あたりの道路に直径10m近い大穴が、忽然と出現していました。見たこともない大穴ですが、一見して爆弾が落ちた跡とわかりました。恐らく最初の爆風は、この爆弾のためだったのでしょう。防空壕入口にいた海軍の兵隊が爆風のため数人死んだと聞きました。

やがて大人達も放心から醒め、瓦礫の山の周りに集まってきました。「三中生は同僚の三中生の死体を探せ」、「工員は工員の死体を」と誰かが大声で叫んでいました。R君が柱の下敷になっていました。内臓が大きく露出していましたが、まだ生きていました。T君、D君、A君、M君、W君の死体を発見しました。Y君が最後まで発見できませんでしたが、大きな肉塊—恐らく胸あたりでしょう—が出てきたので、これがY君だろうと誰かが言っていました。彼等は木造二階建工場の2階—更衣室、食堂等—の更衣室あたりにいたと思われます。大方一団となり、柱、梁、板切れ、屋根瓦、更衣箱等々に埋もれていました。

私達は学友の死体を発掘し終ると、1人ずつ戸板に乗せ3～4人ずつ一団となり、約1km離れた同工業所付属青年学校に運び込みました。私はR君を運びました。「水をくれ」「スマン」「スマン」とさかんに言っていました。学校につくまでどこにも水はありません。青年学校では、死体とまだ生きてはいるが確実に死ぬであろうと軍医が診断した人達が、校庭に直に寝かされていました。そしてまだ生きている者は呻っていました。何十という死体が夏の西日に照らされていました。あまりのショックと異様な光景のためか、誰の目にも涙は出ていませんでした。つぎつぎと運び込まれる死体のなかに、骸炭工場で被爆したのでしょうか。胴の部分で真二つになった死体のうち、頭のある部分を前カゴに、足のある部分を後ろカゴにいれ天秤棒で担いできた工員を目撃した時は、さすがにギョッとしました。担いできた工員も死体も石炭の粉炭で全身真っ黒だったのが、鮮かに思い出されます。

「水をくれ」、「水をくれ」と言うR君の訴えを私達は無視しました。軍医の指示があったからです。水をやるとすぐ死ぬと軍医は言っていました。せめてはご両親が臨終に立会われることを願ってのことと思います。そのうちクラス担任のH先生が駆けつけてこられました。先生もあまりの光景に驚き興奮されたのでしょうか。内臓をムキ出しのまま校庭に寝かされ、「スミマセン」「スミマセン」と謝るR君に対し、なぜ壕に入らなかったかと、叩かんばかりの形相で何度も何度も叱責されていました。T君、D君、A君、M君、W君は外傷はどこにもありません。眠るように死んでしまいました。Y君はさきの肉塊のみで、結局死体は不明でした。やがてR君も息を引き取りましたが、肉親の方が臨終に間に合われたかどうかはわかりません。

その後たぶん午後6時過ぎだったと思います。青年学校の裏山に遺体を焼きに行きました。誰と誰だったかは憶えていません。大きな角材を四角に組みちようど護摩をたくように重ね、遺体をその上に置きました。角材には機械油、恐らく工場の廃油でしょう、ドス黒いネットリとした油をかけていたようです。なかなか暮れない夏の日でしたが、昇天の煙が垂直にあがったのがいたましく、私達は合掌しました。

その日帰宅したのは、夜10時頃だったでしょうか。長い長い1日でした。疲れ果て無事に帰ってきた息子をみて母は涙を流して喜んでくれましたが、爆死した学友にはすまないような気がしました。今朝一緒に朝礼、点呼をうけ、働いていた同僚が夕べには白骨と化するとはどうしても信じられません。しかし、これが戦時下の現実でした。15歳で非業の死をとげた本人の無念さと、ご両親の嘆きを思うと私は心から戦争を憎みます。と同時に、その後今日までの50年間の平和の尊さ、有難さが身に沁みます。そして、彼等の命日には「永遠に安らかにお眠り下さい」と祈っています。



学徒勤労戦没学友の碑（三池高校校庭に建立）